

ザンビアツアー体験記

田中理子

私は今回、ロシナンテスのザンビア事業地ツアーに参加し、ロシナンテスの活動や現地の人々の暮らしを実際に見て学ぶ貴重な機会を得た。

私は現在、看護を学んでおり、将来は国際医療に携わりたいと考えている。そのため、開発途上国の医療の現状や国際保健について以前から関心を持っていた。その中で、ロシナンテスが現地の人々と協力しながら持続可能な支援活動を行っていることを知り、その活動を自分の目で見て学びたいと思い、今回のザンビア事業地ツアーに参加した。



現地では、ルサカにあるロシナンテスの事務所の見学や、チーフチャムカ(ザンビアの中央州にあるレンジェ族の伝統的指導者)のもとへの訪問などさまざまな貴重な経験をさせていただいたが、その中でも、首都ルサカから片道2〜3時間ほどかけて辿り着いたチコンコメニ村のマザーシェルターでの経験が特に印象に残っている。

チコンコメニ村に到着すると、多くの村人やマザーシェルターのスタッフの方々がザンビアの伝統的な踊りや歌で温かく迎えてくださった。その光景は想像以上に迫力があり、現地の方々の歓迎の気持ちや明るさ、地域の結びつきの強さを感じられ、村に到着して間もないにもかかわらず深く心を動かされた。

その後、施設長や SMAG と呼ばれるザンビア村落部の母子保健を支えるボランティアグループの方々から、これまでの活動や現在の取り組み、マザーシェルターの役割についてお話を伺ったり、実際に施設内を見学した。チコンコメニ村では以前、家から医療機関までの距離が遠く、自宅や路上での出産による母子の健康リスクが大きな課題となっていた。マザーシェルターは、そのような課題の改善を目的として設置され、出産を控えた妊婦が安心して過ごせる場所として活用されており、マザーシェルターが地域の母子の命と健康を守る重要な役割を果たしていることを学んだ。



また、今回の訪問を通して、支援の在り方についても学ぶことができた。支援と聞くと、物資や資金を提供することや、支援者が継続して現地で活動することをイメージする方もいるかもしれない。しかし、ロシナンテスの活動は物資を提供したり施設を建設して終わりではなく、現地スタッフや行政、地域住民と協力しながら継続的に運営・改善を行い、ロシナンテスのスタッフがいなくても地域の人々が主体となって活動を継続できる仕組みづくりが行われていた。その姿から、現地の人々が自ら地域の課題を解決できるよう支えることこそが、本当の意味での持続可能な支援であると学んだ。

さらに、現地の方々との交流を通して、人と人とのつながりの大切さを強く感じた。生活環境だけを見ると、日本と比べて不便な部分も少なくない。しかし、多くの方々が笑顔で互いに助け合いながら生活しており、その姿はとても印象的であった。私はこの経験から、豊かさとは物質的なものだけではなく、人とのつながりや支え合いの中にも存在するのだと気づかされた。

これまでさまざまな経験や学び、感じたことを綴ってきたが、帰国した今、私が最も強く感じていることは、純粹にザンビアの人々や文化が好きだということである。現地では、目が合うと自然に笑顔を向けてくれたり、地域の人々が互いに支え合いながら生活していたりする姿が多く見られた。日常の些細な出来事にも幸せを見出し、笑顔で過ごす人々の姿がとても印象的であった。



今回、実際に現地を訪れたことで、日本にはなかなか感じる事のできない現地ならではの温かい雰囲気に触れ、「国際医療に携わりたい」という思いがより具体的な目標へと変わった。

また、現地を訪れたからこそ知ることができた現状や学びを、周りの人たちにも伝えていきたいと考えている。私自身がそうであったように、一人でも多くの人が国際保健や開発途上国の現状に関心を持つきっかけとなれば嬉しい。

ザンビアで出会った方々やロシナンテスの皆様との経験は、私にとってかけがえのない財産である。今回学んだことを一時的な経験で終わらせるのではなく、国際医療を目指す上での原点として大切にしていきたい。そして将来は、国際医療の現場で異なる文化や価値観を理解し、現地の人々に寄り添いながら活動できる人材となり、またこの地に戻ってきたい。